



多様な日本の昆虫

日本の昆虫は多様である。どのくらい多様なのか、数字で表現してみる。

日本産昆虫総目録によれば、日本に生息している昆虫のうち、名前がついている種類数は約30,000種である。大まかな内訳は、鞘翅目（コウチュウ類）が10,000種、鱗翅目（チョウ、蛾）が5,000種、膜翅目（ハチ、アリ）が5,000種、双翅目（蚊、アブ、ハエ）が5,000種、半翅目（セミ、ウンカ、カメムシ）が3,000種、その他の目の合計が2,000種である。

ところが、日本の昆虫には名前がついていない種類（未記載種、未記録種）も数多く存在している。それらを大まかに想定すると、鞘翅目は5,000種、鱗翅目は3,000種、膜翅目は10,000種、双翅目は10,000種、半翅目は2,000種ほど存在していると考えられている。名前がついていない昆虫の種類数は、名前がついている昆虫の種類数とほぼ同じ30,000種ほど存在している計算となる。本当のところどうなのかは誰にもわからない。し

かし、「まだまだ日本には名前がついていない昆虫が数多く存在している」という事実は、種類数の多いグループに取り組んでいると、ある程度実感がわいてくる。例えば、双翅目のガガンボ科では名前がついた種類は日本に約700種ほど生息しているが、名前がついていない種類はおそらくその3倍生息しており、合計で3,000種前後は生息しているであろうと推定されている。同様に鞘翅目のハネカクシ科では名前がついた種類は1,500種程度だがおそらく3,000~4,000種、膜翅目のヒメバチ科では名前がついた種類は1,200種程度だがおそらく3,000種前後、双翅目のユスリカ科に至っては名前がついた種類は800種程度だがおそらく5,000種以上は生息しているのではないかと推測されている。ものすごい数字である。

世界で一番昆虫の解明が進んでいる国はイギリスである。イギリスの昆虫の解明度は99%程度だと云われており、その

ウォンテッドカルテ その1

種名	アカハネバッタ		
	直翅目	科名	バッタ
	<i>Celes skalozubovi akitanus</i> (Shiraki,1910)		
目名	直翅目	科名	バッタ
珍品度	形態		
	25~27mm、35~40mm 中型のバッタ。褐色。		
	後翅基半部が赤いため、アカハネバッタの名前がついた。 後腿節の背面より内側に黒褐色の3帯があり、後腿節には3個の暗い藍色の環がある。 はためでずんぐりしている。		
分布	本州（秋田県、新潟県、東京都、長野県） 国外では朝鮮半島北部、中国東北部、内モンゴル、東シベリア		
生態	7月から8月に採集例がある。 まばらな松林などの下草に生息する。地上性である。 産地は局限され極めて少ない。		
その他	知る人ぞ知るバッタ界の超ウルトラ級の珍品である。 一番最近の採集例は10年以上前に新潟県柏崎市の松林で採れたつきりである。 今年、北海道大学図書刊行会から発行予定の日本産直翅類大図鑑に載せるために、多くの日本直翅類学会会員が本種に挑戦したが、結局誰も採れなかった。		

ウォンテッドカルテ その2

種名	フサヒゲサシガメ		
	半翅目	科名	サシガメ
	<i>Ptilocerus immitis</i> Uhler,1896		
目名	半翅目	科名	サシガメ
珍品度	形態		
	体長6~7mm。		
	淡黄褐色で光沢があり、極めて長い同色の剛毛でおおわれる。 腹部下面基部に長毛を密生した特殊な腺の開口部がある。腹部の腺はアリに対する誘惑腺と考えられている。		
分布	本州、九州		
生態	松の樹皮下で群生しアリを捕食する。		
その他	体が扁平で、触角と脚にフサ状の長毛が密生している。形状が珍しい上に松の樹皮下でアリを集めて捕食するという奇習が知られているため、カメムシ屋なら誰もが一度は手にしたいと思う大珍品である。 本種の確実な記録は、和歌山県橋本市1950年3月18日採集の5個体である。それ以降50年以上確実な採集記録がない。 最近発行された和歌山県レッドデータブックでは絶滅種とされている。		

【参考文献】

<アカハネバッタ> 宮武頼夫・加納康嗣(1992)検索入門セミ・バッタ,保育社 / 小林正明(1981)信州の秋に鳴く虫とそのなかま,秋の虫の会
<フサヒゲサシガメ> 朝比奈正二郎・石原保・安松京三(1965)原色昆虫大図鑑,北隆館 / 後藤伸(1996)紀州で"むかし"採れたカメムシ類
その後見つかりませんか【1】,かめむしニュースVol.4:4-5 / 宮武頼夫(2001)保全上重要なわかやまの自然 昆虫類,和歌山県環境生活部

種類数は18,000種程度である。解明度99%で種類数が18,000種のイギリスに比べて、解明度50%以下で種類数が30,000種の日本は、ものすごく昆虫が多様な国であると言い切れる。と同時に、日本の昆虫相が100%解明される日は、はたしてやってくるのだろうかと少々悲観的な思いにもかられてしまう。現在の30,000種に到達するのに、明治時代から約100年かかっている計算になるから、残り30,000種の解明にはあと50年以上はかかりそうな気がする。昆虫の分類で生計を立てることがほとんど出来ない日本では、これよりも早くなることはまずないであろう・・・残念ながら。

ハチハエカメムシは宝の山

チョウ カミキリムシという虫屋の王道を歩いてきて、ある日発作的に「よしハエをやろう！」と決めてから、5年ほどが経つ。良い図鑑があり、多くのプロ

アマが活動している鱗翅目と鞘翅目に比べて、図鑑では同定が困難でプロアマも非常に少ない膜翅目、双翅目、半翅目など（一言で言えばハチハエカメムシ）に取り組んできたが、これらはまさに宝の山である。宝が多すぎて、どれから手をつければいいのか、途方に暮れる日々である。

自宅から30分ほどの狭山丘陵で、あっけなく未記載種や日本未記録種ではないかと思われる種類が採れてしまう。実に経済的である。他に研究している人がほとんどいないため、自分の採集記録がすぐに新知見になってしまう。実に目立ちたがり屋向きである。

チョウやカミキリムシと、ハキリバチやハナアブは昆虫としてはまったく同じはずなのに、一方は日本全国の記録がたくさんあり、一方は記


録が皆無の都道府県すらある状況である。マイナー昆虫に取り組んでいると、アマチュア虫屋のバランスの悪さを痛感する。もっと多くのアマチュア虫屋が、「未記載種や未記録種は当たり前」のわくわくするようなマイナー昆虫の世界に来てほしいと思う。


ところで、チョウやカミキリムシと同じように、ハチハエカメムシにも珍品は存在する。しかし、それらは図鑑類ではなかなかわからない。そもそも図鑑では、どれが普通種でどれが珍品なのか、何も書いていないことが多い。しかし、確実に珍品は存在する。しかも、チョウやカミキリムシと比べても、遜色ないほどに採集困難な種類が多く存在する。それらについて少し紹介する。下記カルテを読んで、少しでもマイナー昆虫に興味を持つ人が現れれば幸いである。

(東京本社自然環境研究室・伊東憲正)

ウォンテッドカルテ その3

ウォンテッドカルテその4

種名	トラツリアブ <i>Anastoechus nitidulus</i> (Fabricius,1794)		
目名	双翅目	科名	ツリアブ
珍品度			
		形態	
		体長8~14mm 銀白長毛が体に密生する。	
分布	本州、四国、九州 国外では全北区		
生態	年1回秋季に出現する。		
その他	双翅目談話会の主要会員に採集経験者が一人もいないため、現在までまったく手がかりがつかめない大珍品のツリアブである。名古屋の岡田正哉氏に聞いたところ、かつて愛知県定光寺で見たことがあるとの事。ツリアブ科はハナバチ類に寄生するので、秋に発生するムカシハナバチ科の珍品に寄生するのもも知れない。最近発行された大阪府野生生物目録に大阪府での記録が載っているが詳細は不明。		

種名	ウスルリモンハナバチ <i>Thyreus centrimacula</i> (Perez,1905)		
目名	膜翅目	科名	コシブトハナバチ
珍品度			
		形態	
		体長12mm内外 ルリモンハナバチに似るが、体の斑紋はルリモンハナバチが青色なのでに対して白青色である。斑紋にも違いがある。	
分布	本州（栃木県、千葉県、兵庫県、岡山県）、九州（鹿児島県）。岡山県では瀬戸内海の鹿久居島に比較的多い。		
生態	コシブトハナバチ科の稀種シロスジコシブトハナバチに寄生する。成虫は7月~9月に見られる。		
その他	日本産昆虫総目録に未掲載の種で、各種図鑑類にもほとんど載ったことがない非常に美しいハナバチ。関東での確実な記録は千葉県の3例（市川市1958年8月、成田市1968年8月、銚子市1969年8月）のみである。寄主であるシロスジコシブトハナバチが大珍品なので、それに寄生する本種はスーパー大珍品であるといえる。		

<トラツリアブ> 朝比奈正二郎・石原保・安松京三(1965)原色昆虫大図鑑,北隆館/大阪府(2000)大阪府野生生物目録
 <ウスルリモンハナバチ> 中村和夫(1997)レッドデータブックの改訂と栃木県のハチ類,インセクト48(1):45-53/須田博久(2000)千葉県の保護上重要な野生生物ハチ目,千葉県環境部自然保護課